

## 前期ライプニッツにおける「観念」について

清水洋貴

十七世紀哲学において、「観念」は最重要な概念の一つであり、この概念をめぐる論争が活発に交わされた。「観念」は、ライプニッツにとつても、自身の哲学的立場を構築するうえで避けられない問題であつたにちがいない。

本稿では、ライプニッツにおいて「観念」がどのような文脈において論じられ、いかなる役割を担っているのかを明らかにしたい。とりわけ、「観念」(idée)と「概念」(notion)との区別という論点に注目したい。この区別は、従来のライプニッツ解釈においてもしばしば言及されてきたが、その意義が十分に汲み取られてはこなかったように思われる。本論考では、『形而上学叙説』(二六八六年)に至るまでの時期(ここではこの時期をライプニッツの前期と呼ぶことにしたい)について検討してみたい。とりわけ、ライプニッツにおける「観念」を論じる際に言及されることの多い、「観念とは何か」(二六七八年)、『認識、真理、観念についての省察』(二六八四年)を議論の材料とする。

「観念」を主題と見なして、三つの著作の課題および狙いをまとめるならば、次のようになるだろう。『観念』論文では、「観念」は、「精神」が「表出する」ことを成立させるところの「機能」として確保される。この際、「観念」は「本性」とともに「表出」の成立にかかわる。これに対して『省察』において「観念」は、「概念」の分析とその結果の「直観」の成立後、はじめてその固有の意味を獲得する。したがつて「概念」の吟味検討という段階が重視され、このことを通じて「観念」の真理性が保証されることになる。『叙説』は、以上のような「表出」論と「概念」論という二つの流れを総合する位置にある。その際、「本質」と「本性」との区別が導入されることによつて、「観念」と「概念」との区別は、位相の異なる「秩序」の「表出」として捉えられることになる。

## 一、「観念とは何か」

### —「思惟する機能」としての「観念」—

ここでは二つの論点を確認しておきたい。第一に、「観念」は「思惟する機能」(facultas cogitandi)であること。この「観念」とは「表出」との連関において捉えられねばならない。第二に、「表出」の「基礎」と、「機能」としての「観念」との関係である。「観念」が、いかなる意味で「表出」の「基礎」としての「本性」から区別されるのかを確認する。この二点を確認したうえで、「観念とは何か」における「観念」が孕んでいる問題点を指摘したい。

### —— 問いの深まり

「観念とは何か」は、その冒頭から「観念」の定義に取りかかる。「観念」と見なされうるいくつかの候補(「脳に刻印された痕跡」、「思惟」、「知覚」、「感情」)が挙げられるが、これらはことごとく否定される(G. VII, 283)。

そのうえでライブニッツは自らの立場を表明する。「観念」は「一定の思惟の働き(現実態)」ではなく、「思惟する機能」として捉えられねばならない、というのである。

しかしライブニッツはこうした解決に満足せず、問いをさらに深めていく。すなわち、「観念」とは何かという問いか

ら、「事象(Res)の観念」を有するとはいかなることかという問いへ移っていくのである。彼のここでの議論の進め方について、つぎの二点に注目したい。第一には、「観念」は、単独で問題化されるのではなく、「事象」が問われることと連関しなければならず、ということ。第二に、「観念」(Res)は、われわれが「有する」とことと連関しなければならず、ということである。「観念」は、一方に「事象」と、他方にわれわれが「有する」という事態と係わらねばならないのである。次に登場する「表出」という考え方によって、「観念」は、この二つの論点を自らのうちに取り込むことが可能になる。

このようにして「事象を表出する」という事態が問題となる。「何らかの事象を表出する」とは、「表出されるべき事象の諸関係に対応する諸関係があるということ」である(VII, 283)。「事象」へと導くだけの「方法」では「観念」を有することにはならない。「事象」の内にいる「関係」に対応する「関係」をわれわれが現に「有する」場合に、「事象の観念」をもつのである。なるほど「方法」も「事象」との何らかのかかわりをわれわれにもたらす。しかしそれだけでは「観念」を「有する」というには不十分なのである。

事象に対応する「関係」を「有する」ことが、「事象の観念」を「有する」ことである。「事象」に対応する「関係」

を、われわれは自らの内から外へと搾り出す (exprimer) という仕方でも獲得する。このようにして、「事象」の有する「関係」と、われわれの有する「関係」とのかかわりが、「表出」という仕方でも確保されるのである。

## 一―二 表出の基礎と「観念」

つぎにライブニッツは、何に基づいて或る関係は他の関係を「表出する」のかを問題にする。すなわち、或るものが他のものの「表出」であることを支えるところの「基礎」(fundamentum) が問題となるのだ。この「基礎」は二つに分けられる。すなわち、「本性」と「自由裁量」である。或る事象を「表出」することは、先に見たように、われわれと「事象」とのかかわりを示していた。表出の「基礎」は、われわれと事象とのかかわりの具体的なあり方を示し、限定する、といえよう。「表出する」ことによつて、事象とわれわれとの繋がりが確保されたうえで、さらに「表出」の「基礎」の提示によつて、われわれと事象との具体的かつ可能な繋がりが限定されるのである。

このように見てきたとき、改めて次のような疑問が生じるのではなからうか。「表出」、および、その「基礎」の導入によつて、事象とわれわれとの繋がりは保証されているのではないか。ここにおいて、なぜ「観念」はいまだに必要なのだ

らうか。「代数の方程式」が「円や他の図形」を「表出する」ように、「精神」が「事象」を「表出する」という説明方式だけで十分なのではないか、と。

決してそうではない。「観念」という「機能」に根ざすということこそが、われわれと事象とのつながり、すなわち「表出する」ことを可能にするのである。「観念」が占めるのは、次のような位置なのである。

「したがつて事象の観念がわれわれの内にあるということとは、事象と精神との等しく作者である神が、「精神が」その自らの働きによつて、事象から帰結することに完全に対応するものを導き出せるように、思惟する機能を精神に刻印したということに他ならない」

(G. VII, 264) 「」は筆者補足。

「観念」とは、「精神」が「事象」から帰結することに対応するものを導きだせるように、「神」によつて「精神」に「刻印された」、「思惟する機能」である。この機能がわれわれの内刻印されているがゆえに、われわれは「事象」を「表出する」ことができるのである。またこの意味において「表出する」ことは、われわれの内から外へという方向性を有するのであった。

それでは、こうした「観念」は、表出の「基礎」とどのよ  
うな関係にあるのだろうか。すでに見たように、或るものが  
他のものの「表出」であるのは表出の「基礎」の支えによつ  
てである。この「基礎」の一つが「本性」であった。これに  
対して、「表出」がある、あるいは、精神が表出できるのは  
「思惟する機能」としての「観念」が働くことによつてであ  
る。「表出」であるための「基礎」と、「表出」があるための  
「観念」とは区別されねばならない。

「事象」とわれわれとの繋がりを根本的に保証するのは「観  
念」である。この根底のうえに、われわれの個別的な「表出」  
活動およびその結果としての「表出」が生じるのである。そ  
の際に、実際に生じた「表出」は、「本性」に基づき、従つ  
ている。このような意味で、表出の成立にとつて、「本性」  
と「観念」とは、それぞれの異なる局面で役割を果たしてい  
るのである。

しかしながら、いかにして「観念」という「機能」が、「本  
性」と協働あるいは結合して、「表出」を成立させるのかは  
判然としない。「本性」の位置づけが十分になされていない  
がゆえに、神に刻印された「観念」が「本性」を自らのうち  
に取り込んでしまうという可能性がある。そうなると、「表出」  
においてわれわれが有する「関係」は、「本性」の制限を経  
ることなく、即座に「事象」の有する「関係」である、とい

うことになりかねない。つまり、「表出」を生じさせる「観  
念」の優位が、「本性」を含みこんでしまうのである。

かくして、われわれが「観念」に訴えうる範囲や条件が、  
改めて問われねばならないであろう。この課題に立ち向かう  
のが、つきに見る「省察」である。これに対して「本性」に  
対する問いが深まるのは、「叙説」においてである。

## 二、「認識、真理、観念についての省察」における 「観念」

この「省察」の冒頭でライプニッツは、「観念」に関する  
デカルトの説明に不満を漏らしている。それに続いて第二段  
落において、ライプニッツ自身の「観念および認識の区別と  
標準」が提示される。この箇所では「認識」は、「曖昧」から  
「直観的」に至るまで区別される (G, IV, 422-423)。

この段落に関して、つぎの二点に注目したい。第一には、  
ライプニッツは、この段落で「認識」の区別を提示する際に、  
「認識」を「概念」(notio) や、その「徴表」(nota)、「構成  
要素」(requisita) 等々という語によつて分類するのであるが、  
一度も「観念」という語を用いていない、ということである。

第二に、「認識」の最高段階にある「直観的認識」の「省  
察」全体における役割についてである。「直観的認識」とは、

「判明な概念」に入っている諸概念が最後まで分析されたうえで、これら諸概念が一挙に思惟されるような「認識」である。概念がすべて分解されること（「適合的」*adaequata*）と、その分解された結果を一挙に直観すること（直観的認識）をもって、「認識」は最高段階に達するのである。

こうした二つの点に注意したうえで、直後の第三段落の冒頭に目を向けてみたい。

「以上のことから既に明らかなのは、直観的思惟を用いるのではない限り (*nisi quatenus cogitatione intuitiva utimur*)、われわれが判明に認識している (*distincte cognoscimus*) ところのものどもであっても、それらの概念を知覚していないということ (*ideas non percipere*) である。」(G. IV, 424)

この箇所は次のように解釈されねばならないだろう。われわれが「判明に認識している」というだけでは「概念を知覚する」ことは成立しない。「直観的」な「認識」ないし「思惟」の成立によってはじめて「概念を知覚する」という枠組みがここで提示されているのである。かくして、「認識」の最高段階に到達することで、はじめて「概念」および「直観」という立場から、「概念」および「知覚」という立場へと移行できる、と解釈されねばならないだろう、と。

この解釈は、『省察』のこれ以降の議論によって支持されるように思われる。

たとえば、同じ第三段落において神の存在証明が批判される。「最も完全な存在者の概念」から、この「存在者」が「存在する」(*existere*) ことは導出されない。なぜなら、この「概念」だけでは、この「存在者」が可能であることは示されないからだ。ライブニッツにとって、事象の可能性を捉えることが本来的な課題なのであり、この課題を経由せずに、はじめから「概念」へ訴えて推理することは、断固拒否されねばならないのである。

また第四段落における「真なる概念」と「偽なる概念」という表現によって何が意図されているのだろうか。「概念」が、「可能」な場合に「真なる概念」であり、「矛盾」を含む場合に「偽なる概念」である、とライブニッツは言う (G. IV, 425)。このことは、「概念」と「概念」との区別を念頭におかなければ、その意図するところを理解できないだろう。すなわち、「概念」の分解なくして「概念」の真偽、すなわち「真理」性について語ることはできないのである。

さらに、第五段落ではつぎのように言われる。「なんであれ私がある事象について明晰かつ判明に知覚することは真である、ないしは、その事象について言明されうるという原理」を、人々は「少なからず誤用している」。「もし、われわれが伝達した明晰なものと判明なものととの標準が付け加えられなければ、またもし概念の真理について確立していなければ、

明晰判明に知覚するというこの「公理」は「無駄」である、とライプニッツは言う (G. IV, 235)。つまり、第二段落で彼が提示した「認識」の「区分」と「標準」は、自らと異なる立場の人々に向けて「伝達した」(traditimus) ものなのである。一般に流布する「観念」の用法から自覚的に距離をとろうとする姿勢が、ここに読みとられるべきであらう。この意味で、「観念」(と「知覚」) は一旦留保されねばならない。「観念」(と「直観」) において「認識」が吟味検討されるという段階が必要なのだ。この段階を経て、「観念」について正当に語るができるのである。

以上のように、「省察」の議論の流れを辿ることによって、「概念」と「観念」とのあいだに段階の相違を見て取ろうとする、われわれの解釈の妥当性が示されるのではなからうか。

前節の「観念とは何か」では、「観念」は「思惟する機能」という積極的な内容が与えられていた。これに対して『省察』においては、デカルトの「観念」および明晰判明という基準に対する批判が前面におしだされている。この批判は、「概念」および「認識」の分類という形で提示される。この結果として、「省察」では「観念」とは何であるのかという問いは、最終段落においてわずかに言及されるに留まった。さらに、「表出」に基づいた「観念」の説明はここでは姿を消してし

まう。というのも『省察』の課題は、「観念」を「知覚する」という立場を、「概念」とその「直観的」認識によって統御すること、この一点にあったからだ。この段階では、ライプニッツは「表出」による説明を、この課題にうまく適合させることができなかつた、あるいは、自ら敢えて封印した、と見るべきではなからうか。

以上のような「認識」および「概念」論の成果を維持しつつ、再び「表出」が「観念」と結びつけられるのは、次に見る「形而上学叙説」においてである。

### 三、「形而上学叙説」における「観念」

最後に『叙説』における「概念」と「観念」をめぐる議論について、本稿の内容と密接にかかわる箇所を示しながら、議論の内容を確認していきたい。

「観念」をめぐる議論は二三節から本格的に開始される。二四節では「観念」は「概念」によって制御されるという『省察』と同様の構想が展開される。しかし『叙説』において異なるのは、この構想に対して、「本質」と「本性」との区別という議論が導入され、「観念」をめぐる議論が補強されているという点である。「本質」は「観念」に、「本性」は「概念」に重ね合わされている。「本質」と「本性」につい

て簡単にまとめておくことにしよう。

「本質」と「本性」とは十六節において論じられる。この区別は、神の被造的実体への作用である「奇蹟」を擁護するという文脈のなかで用いられる。「奇蹟」は、「一般的秩序」によつて説明されうるものであり、「われわれの本質」において表出される。この意味で、「われわれの本質あるいは観念」は、「われわれが表出するすべてのことを包括しているもの」であり、限界がない。これに対して、「われわれの本質」においてわれわれは、「一般的秩序」ではなく、それよりも「下位の準則」を表出する。この意味で「われわれの本性」は「限界づけられている」(est limitée)。すなわち、われわれの「本質」には限界がなく、「本性」は限界づけられているのである。

このことは次のように言うこともできる。われわれは、「神」を表出するのでないかぎり、他の実体との能動、受動という関係の内にある(十五節)。こうした実体の相互関係とは、「結局、「本性」という限界の内部における「表出」にすぎないのである。これに対して、「神」を「表出する」ことにおいて、われわれは、「本性」という限界をある意味で越えることができるがゆえに、他の実体との能動・受動関係を越えるのである。

「本質」と「本性」をめぐる以上のような議論が、二七節

において、「観念」と「概念」の解明に用いられる。以下ではこの節について検討してみたい。

ここではまず、ライブニッツの「概念」に対する見解が示される。ライブニッツは、「われわれの知性のうちには感覺に由来しないものは何もない」というアリストテレスの見解に、一定の修正を加えながら、受け入れられている。つまり「概念」は、一部のものを除いて、感覺に由来する<sup>(9)</sup>というのである。

しかし、ライブニッツは、こうした見解に満足できず、今度はプラトンを持ち出す。アリストテレスの見解が示されたこの地点において「プラトンはいつそう深くまで進んでいる」。というのは、「形而上学的真理の厳密さが問題である場合」には、「われわれの魂の及ぶ拡がり」と独立とを認める「ことが「重要」であり、「われわれの魂はふつうの人が考えるよりも無限にいつそう遠くに進んでいる」からである。プラトンに言及することで、「概念」を越えた立場が示唆される。「概念」についての議論がこのように展開されたうえで、「観念」と「概念」との区別がいまや明確に提示される。

「概念」<sup>(10)</sup>とは、「人が概念把握ないし形成している」(est concept ou forme)「表出」である。「概念」は、「感覺」や日常の経験において実際に形成される。ここには奇蹟論における「本性」が重ねあわせられる。すなわち、「概念」は、限界

づけられた「われわれの本性」のなかで形成され、「下位の準則」に対応するものである。

これに対して、「観念」(Idees)とは「人が概念把握している」といまいと (soit qu'on le conçoit ou non)、「われわれの魂のうちにある表出」である。「観念」は、われわれが現に有する「概念」を越えて、「事象」を表出することを可能にする。「奇蹟」論を踏まえるならば、「観念」は、「われわれの本性」に対応した「下位の準則」を越えて、「一般的秩序」に属する「奇蹟」を「本質」において「表出する」のである。「観念」は、われわれが現に形成している「概念」に束縛されず、われわれが現に概念把握していない何かをすでに「表出」しているのである。

以上によって、『叙説』のうちに、アリストテレス的立場としての「概念」、「本性」と、プラトンの立場としての「観念」、「本質」との対比が確認された。ここでは、奇蹟論を出発点として、「表出する」ところの対象あるいは「秩序」の位相の違いによって、「観念」と「概念」は捉えられているのである。

## 総括

『観念とは何か』、『省察』、『叙説』における「観念」につ

いて検討してきたが、この一連の著作のなかには議論の深まりあるいは進展を認めることができるように思われる。

『観念とは何か』において「観念」は、「精神」が「事象」を「表出する」ことを可能にする「思惟する機能」であった。ここでは、「観念」は表出があることを、表出の「基礎」としての「本性」は表出であることを、可能にする制約であった。この際、「表出」は一つの階層しか想定されておらず、この表出の成立のために「観念」と「本性」はともに寄与する、という構造にある。これに対して『叙説』では、「観念」と「本性」(あるいは「概念」とは、それぞれ別の階層にある「秩序」を「表出する」のである。この意味において「観念」と「本性」とは明確に区別されるのである。

つぎに『省察』では、デカルト批判を導きの糸として、「観念」は、「認識」および「概念」によって制御された。「認識」の分類の最高段階に到達して、はじめてわれわれは「観念」について語りうる、とされたのである。

『省察』のこうした成果を踏まえたうえで、『叙説』では、「観念」と「概念」との区別のうえに、「本質」と「本性」との二分法が重ねあわされた。いまや「観念」は、たとえわれわれが現に「概念」としてはもっていないなくても、「奇蹟」や「本質」を「表出する」、「われわれの魂の性質」(二六節)である。『省察』において明確になった「概念」から「観念」

への移行は、『叙説』においては、いつそう高次の「秩序」を「表出すること」として捉えなおされている。

それでは、以上のような「観念」説は、全体としてはどのように解されるべきであろうか。「観念」とは、われわれが現に「形成」し、それによって生きている生の領域あるいは秩序であろう。このような「観念」を吟味せず、また「事象」の可能性を問うこともなく、こうした生の中に留まることも可能であろう。この生から上昇し超出することは、われわれにとって容易ではない。というのは、ライプニッツは、人間が概念の分解と直観的認識をなしうると主張することに慎重であつたからだ。また別の理由によつて、こうした上昇は容易には許されえない。というのも、概念における生を越えるということとは、人間の「概念」的な相互理解の領域を越えていくことだからである。つまり、「観念」を「観る」者は、「概念」、「本性」によつて生きている者によつてはもはや理解できない、ということになるからである。

それでは、ライプニッツは、われわれの眞の相互理解の場を、「観念」に設定していたのだろうか。

われわれは、この世界の中に現に存在するもの、あるいは、「自然」を、経験や習慣とは別の仕方で見ることが出来る。

このことがまさに、「事象」の可能性を問うことの始まりであり、ここではすでに「観念」が先取りされている、と言え

ないだろうか。「観念」を「観る」ことを目指したこうした活動は、同時に「自然」あるいは「概念」をいつそう明晰判明に「認識」することでもあるだろう。こうした活動において、われわれは「観念」と「概念」の両側に足を置いている。「概念」ではなく、「事象」の可能性を問う場面をわれわれの相互理解の場とすべきだ、とライプニッツは考えていたと言えないだろうか。

#### 注

ライプニッツの原典はゲルハルト版を用いた。翻訳に際して「ライプニッツ著作集 第八巻」、一九九〇年、工作舎を参照した。

(1) 例えば、石黒ひで、『増補改訂版ライプニッツの哲学』、二〇〇三年、岩波書店、三六頁、および、酒井潔「世界と自我」、一九八七年、創文社、三〇七頁、注28を参照。

(2) expressionの原義は「果汁などをしぼり出す」ということであり、「内容的なるものの提示を意味する」、あるいは「外へ向かつて押し出す」ことを意味する（今道友信、「表現とその論理的基礎」、講座哲学体系第六巻）、人文書院、一九六四年、四五頁。

(3) 例えば「大門」と「小門」との表出関係（これは「類似」と呼ばれる）は、「本性」という「基礎」を有する。これに対して、「音声や文字」による「表出」は、「事象」との間に厳密な意味での「類似」は認められず、この意味において表出の仕方には選択の余地が認められる。

(4) デカルトとライプニッツにおける「明晰」、「判明」という語の用法の異同および解釈に関してはすでに多くの議論がなされているが、ここでは詳細に扱うことができない。機会を改めて検討したい。

(5) この箇所に関して Hans Poser は、cognitio と notio とが交換されうる、

と指摘する (Sternum, notio und idea, Zeitschriften für Semiotik, Akademie Verlagsgesellschaft, Athenon, 1979, p. 322, n. 41)。

(6) ハイネッカーは、ライプニッツに於いて「真であること」は「明晰かつ判明に知覚されて有ること」とはなく、「適合的に直観的に知覚されてあること」だと指摘する (Martin Heidegger, Gesamtausgabe, Bd. 26, Metaphysische Ausgangsgründe der Logik im Ausgang von Leibniz, Hrsg. v. Klaus Heide, Frankfurt a. M. 1978, p. 83; 酒井訳、創文社、1980年、九二頁)。「知覚する」という語をライプニッツの立場の説明にも用いるのである。しかし、われわれとしては、「観念を知覚する」というデカルト的用語法に対して、ライプニッツは「適合的」概念」と「直観 (の認識) を意図的に対置して用いている」と解したい。

(7) 本稿では、マルブランシュおよびアルノーの「観念」説をライプニッツのそれとの比較検討は割愛せざるをえない。「」では「密察」の第六段落について若干言及しておこう。「」では、アルノーとマルブランシュとの観念論争を下敷きにして、「観念」とは何であるのかが問われている。「」でライプニッツは、「たとえすべてを神のうちにわれわれが観るとしても」「われわれは固有な観念を有する」のであり、「の「観念」は「われわれの精神の変状ないしは様態化 (affectiones sive modificationes mentis nostrae)」であり、「神のうちにわれわれが知覚するものの」の自身に対応する」と主張している。さらにまた、「われわれによって実際に (act) 思惟されているのではない事象の諸観念がわれわれの精神のうちにある」とも述べている。

(8) 例えば、十三節において「概念あるいは本性」という表現が頻発する。

また「観念」と「本質」とは十六節において重ねあわされている。

(9) この点に関しては三つの順番があることとなります。個別的感覚の各々に与る対象であるひとえに可感的なもの、共通感覚に属している可感的にして同時に可知的なもの、そして知性 (entendement) に固有なひとえに可知的なもの、です。第一と第二の概念は共に想像的ですが、第三は想像力を超えています。第一と第三は可知的で判明ですが、第一は明晰

で再認可可能 (reconnaissables) ではあっても混雑しています。」「(感覚と物質とから独立なものにことごとく) G. VI, 502)

(10) 概念が感覚に由来するとはどういうことだろうか。ライプニッツが考えているのは、「コヘルニウス説に従う人々」が、日常生活において「太陽が昇るとか沈むと依然として言い続ける」こと、あるいは、「ある外的な事象が、われわれの魂をある一定の思惟に規定する諸理由をとりわけ含んでいる、あるいは、表出する」という場面である。先の言い方に従えば、ある実体が他の実体に影響を受けている場面である。

(11) この箇所ではライプニッツは、「人が概念把握ないし形成している表出は、概念と言われうる」(celes qu'on conçoit ou forme, se peuvent être notions, concepts) と書いている。「」では「観念」と「概念」をわけて「わかれぬ」と「conceptus」とを並べて表記している。

(しみず・ひろき 筑波大学大学院博士課程)

哲学・思想研究科)